# はしがき

## 本書の目的と使い方

本書は、高校を卒業して大学に入学したり、社会人として仕事に就いた人たちを対象に、家族と法について考えるものです。

人は誕生の時点では、ひとりでは生きていけません。親や保護者が食事をはじめさまざまな世話をします。少しずつものごとを覚え、保育所、幼稚園、学校などに通い、友だちと遊び、親や保護者に宿題を見てもらったり、家の手伝いをしたり、ほめられたり、叱られたり、慰められたり、励まされたりしながら、大きくなっていきます。やがて自立し、パートナーと出会い、一緒に暮らし、子どもを育てる人もいれば、シングルで生きていく人もいます。パートナーとの別れを経験したり、自分やパートナーの親の世話をしたり、遺産分けのトラブルに巻き込まれたり、それぞれのライフステージでさまざまな問題に遭遇します。

そうしたときに、人に問題を解決してもらうのではなく、人に相談しながらでもいいですから、自分で考え、自分で解決に向かって進んでいく力を身につけてほしいと思います。そのためにたくさん知ってください。「知は力なり（Knowledge is power）」と言います。

本書では、出生（子どもの権利と個人の尊重）、パートナーと暮らす、親子となる・子どもと暮らす、別れと絆、老いを看取るという５つのライフステージ別に、それぞれ５つのテーマを選びました。全 25 章ですが、婚外子、戸籍のない子、セクシュアルマイノリティの人たち、結婚しても夫婦別々の名字を名乗る人、不妊のために他人から精子や卵子の提供を受けて子どもをもうけたい人など、どちらからといえば少数の人たちの問題を数多く取り上げています。DV や児童虐待、離婚、高齢者の介護などつらいこと、しんどいことも取り上げています。

なぜかと言えば、家族の法は、少数の人たち、弱い立場にある人たちを護るために、また、つらいこと、しんどいことを社会全体で支えるために存在すべきだと考えるからです。そうなっていない場合には、どこかに問題があるのです。それらを読者と考えてみたいと思いました。

読者は、まず本文を読んでみてください。知らない言葉や概念があれば、欄外の⇔印の解説を見てください。ここでは本文の補充もしています。コラムでは、本文と関連する資料や追加の記述があります。視野や理解を広げてみてください。読者が無事エピローグまでたどり着くことを祈っています。

最後に、本書の企画段階でお世話になった法律文化社編集部の舟木和久さん、細かな編集作業をしていただいた瀧本佳代さんに心からお礼を申し上げます。

2018 年 6 月 23 日

二宮　周平

＊初版刊行後８年の間に、重要な家族法改正があり、また、セクシュアルマイノリティの権利保障について新たな展開がありました。補充を兼ねて第２版を刊行します（2026 年 8 月 18 日）。